



## 最高の授業？

研究推進委員長

「これから1時間目の授業を始めます。」

私は日直さんのこのあいさつを聞くと、いつもどこか居心地の悪さを感じます。みなさんはいかがでしょう。私が感じる違和感は「授業」という言葉です。授業の「授」は、「授ける」。業は、「学問」という意味です。ここに主語を入れると、「これから先生が、学問を授けます。」という表現になります。つまり、授業における児童は受動的です。

目指すべき授業は、児童は能動的、主体的に考え、話し合い、答えを導き出していく。時に方法を見失い、誤った方向に迷い込んでいく。そんな時に教師がその誤りを示唆し、正しい方向へ導いていき、子どもたちの力で答えや結論を作り上げていく手助けをしていく。この教師の役割をファシリテーター（潤滑油）と呼びます。だから、授業とは、教師が学問を教師が授けるものではなく、子どもたちが「作り上げ」ていくものなので「作業」と表現したいところです。

本校では、この「作業」を学び深い1時間にするために6つの視点で研究を行い、授業づくりを考えました。

刺激（子どもがワクワクして考えてみたい、やってみたいと思わせる仕掛けを設定する。）  
深さ（子どもが頭をひねって考える良問を設定する。）  
幅（答えまで、解き方・考え方が何通りもある良問を設定する。）  
時間（45分間の中で長く考える時間を設定する。）  
量（最適な問題数を設定する。）  
速さ（問題を認知し⇒判断⇒実行のスピードを上げるトレーニングを設定する。）

本年度は2年生、4年生、5年生で研究授業を行いました。その結果、どの学年でも共通して着目したのは刺激でした。子どもたちをワクワクさせる刺激があればこそ、子どもたちは頭を抱えながらも深くよく考えたり、たくさん問題でも嬉々として意欲的に向き合ったりするのではないかと。そんな考察を授業の後の協議会では、先生方が侃侃諤諤、意見を戦わせ合っていました。

教師が仕掛けた刺激によって、子どもがワクワクして問題に取り組んでいる。これが、教師にとって至福の瞬間です。ワクワクの語源は、「湧く」「沸く」という説があります。つまり、やる気が心の底から溢れるように「湧き」、そのやる気がフツフツと「沸く」。我々教員自身も「湧く沸く」して、子どもも「湧く沸く」する「作業作り」に励んでいきたいと感じています。